

二〇一九年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

国語 入学試験問題

一般入試A日程

受験番号

氏名

- (注意)
- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
 - 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄に必ず記入してください。
 - 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
 - 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
 - 五、試験時間は六〇分です。

(一) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は他の動物よりも高度な学習能力を備えている。そして現在よりもより、先々の損得、さまざまな利害得失を考えながら行動する。なお、「損得」とか「利害」というと利己主義そのもののように聞こえるかもしれないが、必ずしもそうではない。損得や利害には、お金やモノなどのほか、周囲との人間関係や精神的なストレスなども含まれる。さらに自分がどれだけ世の中に貢献できるか、他人のために役立てるかといった利他的な目的まで含まれている場合もある。

いずれにしても、人間の行動の大部分はそうした広い意味での計算や打算に基づいている。

したがって、学生が自分から発言しないとか新入社員が「指示待ち」だといわれるのも、そのほうがトクだと学習してきたからである。

大学受験を大きな目標として学校生活、家庭生活を送ってきた子どもたちは、へたに自分の意見を主張したり、物事をとことん考え抜いたりするより、テストでよい点をとることだけを考え、黙々と勉強するほうがトクだと知っている。教師や親も、生徒やわが子にそうした態度をとらせようとしてきた。

そのようにして育った子が大学に入り、受験から解放されたからといって、急に自分の意見を持ち、積極的に発言し、行動できるようになるはずがない。

それは就活（就職活動）、そして入社後も同じだ。

会社は表向き、「とんがった人材を」とか「出る杭を求む」などどうたいながら、実際には、採用後、すぐに辞めたり問題を起こされたりすることを恐れ、無難な人材を採りがちになる。それは人事部や採用担当者が、失敗のリスクを a オカすより自らの保身のためにも、無難な人材を採っておいたほうがトクだと考えているからである。直属の上司もまた、考えることは同じである。

さらに、自分だけ意見を主張したり自分から行動したりすると、周囲からも浮いてしまう。就活生や若手社員は、そうした現実を心のなかではわかっているため、受け身の姿勢をとらざるをえない。

つまり、受け身、指示待ちは、彼らにとって、ある意味で A 的な姿勢なのである。

ところが近年、「受け身のほうがトク」な構造が崩れつつある。それを象徴するように、あるタイプの学生が有名企業から三つも四つも内定をもらってくる。それは、とにかく自分から行動できる学生である。

学部のゼミで研究テーマを決めるときは自分から提案するし、テーマが決まればさっそく会社にあポをとり取材に出かけていく。他学部の学生を巻き込んだイベントを企画し、実行する。ゼミ生のなかには有名建築家をゲストに呼んできたり、自ら大学と掛け合って同窓会を立ち上げたりした学生

もいた。ある学生などは、就活のときに相手企業のビジネスプランを作成していき、自分からプレゼンさせてもらったそうだ。受け身の「イヌ型」とは **B** 的なこうした学生が、企業の採用の **b 門戸** をいとも簡単に開けているのである。

つけ加えておくと、彼らはただ自発的、積極的ただけではない。けっして他人に迷惑をかけたり、周囲との軋轢あつれきを生んだりしない。後述するように、その意味でも彼らは①「ネコ型」なのだ。

こうした②潮流の変化は、会社の内側でもみられる。最近は大企業のなかにも若手社員の提案や企画を積極的に取り入れる企業や、ビジョンと行動力のある三〇代の社員を幹部に抜擢はってきするような企業もあらわれてきた。

興味深いのは、周りがたいてい「イヌ型」なので、稀少な「ネコ型」が際だつのか、ライバルが少ないためか、革新的な会社における彼らの活躍ぶりも、周囲に与える影響力も突出の度合いが半端ではない。「出る杭は打たれる」という日本の組織で、これだけ自分の好きなように仕事ができるのかと驚かされることもある。「出すぎた杭は打たれない」のかもしれない。

さらに大多数を占める「イヌ型」の人たちの多くは、自分たちの本音を **c ダイベン** してくれる人、現状を打破してくれる人を心のなかで待望している。「出すぎた杭は打たれない」どころか、むしろ周囲から押し出される場合も少なくないのである。

このように「ネコ型」が③日の目をみるようになった最大の要因は、なんといっても急速な技術革新であり、とりわけIT化やソフト化の影響が大きい。

ロボットや自動機械、パソコンやインターネット、POSシステム等等などの普及により、生産現場、オフィス、店舗などあらゆる職場において、単作業は大幅に減少した。与えられた仕事をただ黙々とこなせばよい時代ではなくなったのだ。

C 技術や情報といったソフトウェアの価値は、ユニークつまり唯一であることが絶対条件である。他人のまねをして同じものをつくっても何の価値もない。そしてユニークなもの、新しいものをつくるには高度で自発的なモチベーションが必要になる。

ところが「イヌ型」のマネジメントのもとでは、自発的なモチベーションは生まれにくい。そして創造性も発揮されない。このことは作家、芸術家、科学者など **D** 的な仕事をする人に、いくら強制・命令しても優れた成果があらぬことをみても納得できるだろう。

日本人がほんとうの **リやる** 気りに欠けること。そして仕事の成果もあがらなくなっていること——。各種の調査結果がそれを裏づけている。まず、**リやる** 気りについてみてみよう。

ビジネスの世界では、近年、「ワーク・エンゲージメント」という尺度が注目されるようになった。シャウフェリ (W. B. Schaufeli) らによって開発された、仕事に対する積極的な関わりかたをあらわす尺度であり、活力、熱意、没頭の三要素からなる。この尺度を用いてさまざまな機関が国際比較

調査をおこなっているが、いずれの調査でも日本人のワーク・エンゲージメントは世界でもっとも低い水準にある。

たとえば、アメリカの調査会社ギャラップが二〇一七年におこなった調査によると、日本人のエンゲージメントは、一三九か国中一三二位である。また同じく、アメリカの人材コンサルタント会社ケネクスが、二〇一二年に世界二八か国の正社員を対象におこなった調査でも、日本人のエンゲージメントは最下位で、しかも極端に低い。

このように本物のリやる気リが欠けていけば、仕事の成果があがらないし、企業や社会の競争力も低くなる。

日本生産性本部のデータによれば、日本の国民一人あたりGDP（国内総生産）のOECD加盟国内における順位は、一九九二年の七位から二〇一五年には一八位にまで落ちている。主要七か国の時間あたり労働生産性も日本は極端に低く、アメリカやフランス、ドイツの三分の二にも満たない。またIMD（国際経営開発研究所）が毎年発表している各国の国際競争力をみると、日本は一九九二年には第一位だったが、二〇一七年は二六位である。

注目すべき点は、生産性にしても国際競争力にしても一九九〇年代の半ばに日本の地位が急落し、その後も回復がみられないことである。九〇年代半ばといえば「ウインドウズ95」が発表されるなど、いわゆる「IT革命」が世間をEがせた時期である。ITの時代にマッチした能力と意欲を引き出す仕組みがいかに欠けていたかを物語っている。

さらに、IT化、ソフト化がより進んだAI（人工知能）時代に必要な能力や意欲とはどのようなものか。それについて考えてみよう。

ネコを飼っている人ならわかると思うが、ネコは人間のd魂胆を鋭く見抜く。ふだんはエサをみたら近寄ってくるが、ネコを捕まえようと思っているときはエサをみせても近づかない。また初対面の来客でも、ネコ好きの人には甘えにいくが、ネコ嫌いの人が来たら帰るまでソファの後ろに隠れている。

その人がネコ好きか、ネコ嫌いなのかは、私たちは聞くまでわからないが、ネコは直感的にわかるようだ。

私たち人間も、日常は直感にしたがって行動していることが多い。何となく風邪を引きそうだなと思ったら体温など測らずに風邪薬を飲むし、車の運転をしていて事故の危険を感じたら標識がなくても徐行する。勘やひらめき、インスピレーションも直感と同じようなものだ。科学者や作家、芸術家は入浴中や散歩などに突然すばらしいアイデアが浮かぶことが多いという。

にもかかわらず、直感や勘には、④知識や理論などに比べてレベルが低そうなイメージがある。直感や勘のようなアナログ的能力はAI化で淘汰されると考えている人もいる。しかし、そうだろうか。

一九七〇年代のME（マイクロエレクトロニクス）革命、九〇年代からのIT革命により、単純な作業はつきつきと機械やコンピューターに取って代わられた。たしかに、そこでは単純労働などアナログ的な能力に頼る人の仕事がつきつきに奪われていった。「これからは知識労働者、専門職の時代である」とよくいわれたものである。

そして新たにやってきたのが、AIやビッグデータなどに支えられる第四次産業革命である。ところが、こんどは以前と様相が変わり、高度な知識や

理論を用いる仕事が奪われようとしている。情報・知識の蓄積や論理の展開は、高度化したIT、つまり学習能力をもつAIが得意とするところだからである。

そうになると、教師、弁護士、会計士、医師などの専門職もeアンタイではない。現に蓄積された膨大な判例や症例を用いて、弁護士や医師の仕事をF的に肩代わりするシステムも開発されようとしている。したがって単に既存の知識を応用し、型どおりの論理展開をするだけでは、専門職といえどもAIに淘汰されるだろう。しかも専門職は賃金や報酬などのコストが高いぶん、単純労働よりもむしろ代替されやすいというみかたさえある。

G、デジタル化できる仕事や、インプットとアウトプットの関係がパターン化できる仕事は、遅かれ早かれAIやロボットに代替されていく運命にあると考えてよい。

逆に解釈すれば、知識として伝達したり理論として説明したりできないものは、⑤AIなどに代替されにくいということだ。AIはみえないもの、つかみどころのないものをまねるのが苦手だからである。

直感は、その代表格である。

（太田肇『ネコ型』人間の時代』

注1 小売店で用いられる商品の販売情報の管理システム。レジで商品のバーコードを読みこむことによって、いつでもどの商品がどのくらい売れたなどの情報がコンピュータに送られる。

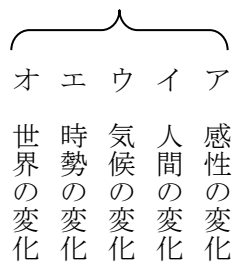
問一 二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 空欄A・B・D・Fに入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同一の選択肢を複数回用いてはならない。

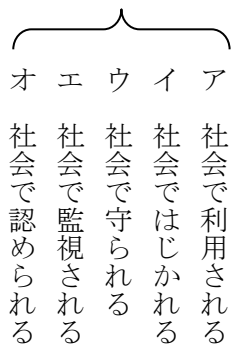
ア 合理 イ 情熱 ウ 対照 エ 全体 オ 創造 カ 部分

問三 傍線部②「潮流の変化」、③「日の目をみる」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

②潮流の変化



③日の目をみる



問四 空欄C・Gに入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同一の選択肢を複数回用いてはならない。

- ア むしろ イ いずれにしても ウ なおさら エ そもそも オ それゆえ カ けれども

問五 空欄Eに入る最も適当な漢字一字を自分で考えていれなさい。

問六 傍線部①「ネコ型」の特徴とは何か。本文中の言葉を使って、六十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

(下書き用)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問七 傍線部④「知識や理論などに比べてレベルが低そうなイメージがある」とは、どのようなことか。その説明として、一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 直感や勘は、知識や理論と比較して、すべてに明確な根拠がないので、信じるに足らないということ。
- イ 直感や勘は、知識や理論と比較して、個人差が大きく、偶然性に左右されるので、一般化しにくいということ。
- ウ 直感や勘は、知識や理論と比較して、矛盾が含まれるので、整合性を証明できるものではないということ。
- エ 直感や勘は、知識や理論と比較して、経験の積み重ねといった要素もあるので、説明不可能な部分があるということ。
- オ 直感や勘は、知識や理論と比較して、視野が狭く、発想にゆとりがないので、変化についていけないということ。

問八 傍線部⑤「AIなどに代替されにくい」ものには、どのような職業があると考えるか。考えられる職業を一つあげ、その根拠を八十字以内で書きなさい。(句読点を含む)

(下書き用)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(二) 次の文章は、重兼芳子の小説「やまあいの煙」の一節である。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

正子は敏夫の歩幅の倍くらいの大股で、蹴るようにして歩く。いつも十米メートルほど先に行っては、気がついたように後を振り返って、敏夫が追いつくのを待っている。正子の広い背中や太い手脚が、敏夫を招き寄せるように前に行く。はじめて好きになった女であった。

食堂は皿を持って並びながら、自由に入れてもらう形式であった。正子は大声で、

「その八宝菜二人前。」

「それ三人前。」

と係の人に言う。係の人は慣れているとみえて、正子が叫ぶ前から皿に **A** 料理を放り投げる。敏夫はうしろからついていって、自分の皿にも入れてもらいながら、正子の食べる量の多さに驚かされるのであった。

「なにしろ重労働でしょ。午後から十人は受け持つのよ。食べとかなないと体もたないもん。」

と言って、食べものを次々と口に詰めこむ。顎の筋肉が丈夫そうで、食道を通る食べものが、よくこなれているだろうと思った。

「あたし、こんな体でしょ。だから今の仕事自分にぴったりだと思う。力が強いし体が大きいから、おじいちゃんやおばあちゃん、絶対に信用してくれるのよ。」

正子はアイスクリームをスコップで掬すくうように、無造作に口の中に放りこんだ。

「ぼくも自分の仕事、気に入ってるんだよ。正子さんと同じだなあ。」

今、言ってしまうかと思つた。敏夫は思った。正子が、「なんの仕事してるの」と聞いたら、 **B** 答えられそうだった。答えるタイミングを計って、一気に言ってしまうとした。

「あたしの体、こんなに大きいでしょう。おとおんなだとか、人によってはもっとひどい言い方で、からかうのよ。中学生くらいするときから、ひどく伸びはじめたのよ。」

「ぼくは中学までで止まったんだ。鉄棒にぶら下ったり、ずいぶん努力したんだが駄目だった。背伸ばし機というの、月賦で買って使ってみたけど、首吊って死にかけてから、やめたんだ。」

「あたしは寝ているうちに背が伸びると聞いたんで、机にもたれて坐ったまま眠ったの。ほら、これそのときの坐りだよ。今、百八十糎センチあるけど、まだ一年に一糎も伸びるのよ。それにほら、鼻の下に産毛まで生えちゃって。この先どうなってるかどうかわからないよ。」

話しているうちに、正子の昼休みは終っていた。仕事のことは言いそびれたままで、敏夫は家に帰った。

午前中一体、午後から一体をきれいにする予定になっていた。敏夫は、出勤するとすぐかまの調子を点検した。火のぐあいが悪いと時間が永くかかるし、焼け方にむらができる。頭から爪先までむらなくきれいな白い石灰が残るように、調子を崩さずに一定の火力を保たねばならない。

すでにどこの都市でも重油のかまが使われていて、自動的に作業が行われている。しかしこの町のうしろに広がる深い山から、薪まきにする雑木が無限といえるほど産出されるのだ。大森林の持主は何代も続いた町の有力者である。同族が経営している木材会社は、町のaサイゲンの多くを占めている。町はずれから、さらに山あいに分け入ったところにある敏夫の仕事場に、木材会社から薪がトラックで運ばれてくる。今使っているのは一昨年の薪で、二年は乾燥させなければ、よく燃えないのである。湿しけた薪は、白い煙が出てくすぶるばかりで、火力が弱い。

薪の組み方にも敏夫が父から教わった方法がある。垂直に井桁いげたを組むのではなく、斜にずらしながら三方から井桁を組んでゆく。三方から寄った井桁は互いに支え合い、火が中から燃え上っていつても崩れ落ちるのが遅い。一本一本の薪が燃えつきるまで、なお井桁の形を崩そうとはしないのである。熱はひとところに偏かたよることはなく、b満遍なくかまを熱し中にあるものを焼きあげる。

人の体の不必要な部分を焰ほのおとともになくして、拾う遺族にとって必要な部分だけをきれいに残すには、習練がいるのだ。来年からは重油焚きのかまに換えられると、役場から知らせがあった。そうなれば薪を焚くのと違って、習練はいらなくなるかもしれない。しかし①敏夫は、かまがどう変ろうと一体一体に心をこめて、その人がひきずってきた体をきれいに仕上げようと思う。違った顔、特徴のある体、それらをなくしてしまつて、最後は同じ物質だけが残る経過を、一生懸命に見届けようと思う。

マイクロバスから喪服の人達が談笑しながら降りてきた。その中の一人が走り寄ってきて、敏夫に金包みを手渡した。

「これ、わずかですが取っておいてください。その代りどうかおじいさんを②念入りに焼いてください。おねがいします。」

と言った。こんなことをしなくても、おれの名人芸は金なんかでは左右されないと聞いたかった。しかし敏夫が金を受け取ることで、相手が安心するならばそれもいだろう。敏夫は金包みを押しただく仕草をして、前掛けのポケットにねじこんだ。

「最後にお顔をごらんになりますか。」

と敏夫が聞く。マイクロバスの人達は「もういいよ」とか、「あれだけ永生きしたんだから、なんにも思い残すことはないだろう」と言いながら、控え室の方に引き揚げてゆく。マイクロバスの人達が、あまりうちしずまず、あっさりしているの、敏夫は内心ほっとした。

薪はすぐに燃え上った。敏夫が点火するのを待っていたように、火が火を呼んで、かまの中はたちまち焰に充たされた。一体を焼くのに、何束の薪を使ったらちようどぐあいがよいか、敏夫にはすぐに分るのである。棺ひつぎをかまの中に滑りこませるときの手応えと、重量で、薪の量の加減が頭の中に浮んでくる。燃え過ぎてもしけないし、燃え足りぬとまたいけない。拾うとき、ほんとうにきれいで清潔な骨片となるように、箸でつまんだ感触が、

C 小さな白い軽石の感じとなるように、焼き上げなければならぬ。

敏夫は油断せず焰の色をにらみながら、かまの蓋についている空気穴を、開けたり閉めたりして調節するのであった。

覗き穴から覗くと、棺のあたりの焰の先が青くなってよく燃えている。九十七歳のおじいさんだから、体の脂もほどよく蒸発していて、干した薪と同じように乾燥しているのだろう。ときには焰が赤黒く変り、煙がくすぶっていることもあるのだが、このおじいさんの体は燃え易くなっているのだろう。

棺の手応えがたいへん重かったり、中に燃えにくいものを遺族が入れていることがある。そのようなときは空気穴を全開にし、薪の上に石油をかけて火を点ける。そして火勢を強くして一気に燃してしまうのである。

二時間ですっかり火が落ちた。敏夫は控え室の人達を呼びに行った。③人々は立ち上りながら、なるべく敏夫と視線を合わせないようにする。敏夫もまともに顔を見ないように気をつける。人々は本能的に、死に近いものから遠ざかるうとする。敏夫のようにいつも死の身近にいるものに、一瞬でも眼を止めれば、自分たちまで死の身近に引き寄せられるような気がするのだろう。それも無理のないことだ。人々は、自分たちが死ぬのはまだ早過ぎると思っているものだから。敏夫から眼をそらすのは当り前のことである。

かまから引き出された鉄板の上の骨は、敏夫にとって会 X の焼き上りであった。自分の持っている技術に、心から満足した。

「脚の方から先に、順序よくお拾いください。この方はよほど脚の丈夫なお方だったのですね。この脚で、生前どれだけの道のりをお歩きになったことでしょうか。」

敏夫は、老人にしては太くて長い脛すねの骨をつまんで、人々に示した。

「大腿骨や股関節うでまひざしの御立派なこと、珍しいです。明治生れの方にしては、体格のよいお方ようですね。」

④言葉はていねいの方がよいし、骨を拾う人達の気持が引き立つように、言葉を選びながら気をつけて、声をかけるのだった。頭蓋骨もたつぷりと大きかった。

「永生きなさいましたただけではなく、頭のよい方だったのですね。御生前はこのすばらしい頭に、よい考えが次々とひらめいて、さぞ世の中の役に立たれたことでしょう。」

はじめは、D 箸を使っていた人達が、敏夫の言葉に頷うなずきながら、しっかりと骨を挟み取るようになった。このようなとき、人々は心からきれいな気持になっていて、けっしてdコジンの悪いところは思い出さないものだ。敏夫が言うことに、ひとつひとつ思い当ることがあるというように、頷いたり涙ぐんだりしている。

「これが、のどぼとけさまでございます。」

灰の中をかき分けて、敏夫がのどぼとけをみつめて拾い上げた。それを、拾った骨の一番上にちよんとおせ、骨壺の蓋を閉めた。

「こんなにきれいに焼き上った方は珍しいくらいです。生前によほどよい御性格だったのですね。お気持がきれいな方ほど、よく焼き上げるものでございます。どうぞ御遺族の方は、そのことを喜んでさし上げてくださいますように。」

敏夫はそう言って人々に一礼した。まだ熱い骨壺を抱えて、人々は穏やかな表情でマイクロバスに乗った。

いつもこのようにゆくといいのだが、と敏夫は思った。九十七まで生きていれば、もう息を吸ったり吐いたりすることに、飽きていたかもしれない。見送る方も、楽に往生させてやりたいと思っていただろう。両方の思いが同じということは、めったにないことだ。だから焼く方も気が楽で、きれいに焼くことだけに精魂こめていられる。

そうでない場合は、骨を拾う方の面倒もいろいろとみてやらなければならない。骨を拾う方の事情はさまざまに違うし、その事情を前から知っているわけではない。棺が着いたとき、重さを量り、周囲の事情をその場で察する。別れにともなって、人々はそれぞれ違った反応を起す。敏夫はすぐに事情を呑みこんで、骨を拾い易いような精神状態に、人々をもっていかなければならない。焼き上がったものが、いくら完全なものであっても、それを拾う人が不完全な拾い方をしたのは、敏夫の苦勞は報われないのである。

一体を焼いてそれを収めるまで、敏夫は自分の精魂を、奪いつくされてしまう。まるで焼かれた体が、敏夫の精魂まで巻きこんで、焰の中に燃してしまふようだ。この仕事を永くしているうちに、一体一体の脂肪や臓器から出る焰が、敏夫の肉体を舐めながら煙を上げていく気分になる。焰に舐められた敏夫の肉体は、Yと同質のものだ。無理な欲望を肥やそうとしたり、あまり自分の肉体を撫でさすることはしない。むしろ自分を虐めて、少しでも周囲の人の気を引き立てようとする。高く燃え上る焰の消えたあとに、軽くて乾いた骨が残る。どの体も必ずそうなる。敏夫は、くりかえしてそれを見ているうちに、焼かれてゆく体も、まだ焼かれぬ肉体を持っている人達も、そう大きな違いは無いような気がしてくる。たてよこ大きな人に出会おうと、無意識のうちに、何束くらの薪が要るのかと考えて、はっとすることがある。

正子に会ったとき、たてよこ大きな体型を見て、E棺に寝た姿を、知らぬまに思い浮べていた。丸い頬や、しゃくれた低い鼻、つむった切れ長の眼の線などが、親しみをこめて見えてくる。好きだという感情と、全く無理なくその顔が重なるので、敏夫は困ってしまう。ほんとうはeエンギでもないことなのだ。⑤一種の職業病といえるものかもしれない。自分が好きになった女にまで、そのような想像をめぐらしてしまうことに気付いて、結婚する資格は無いのではないかと、あきらめようとした。しかし、若い夫婦を見てから、敏夫はやはり妻が欲しいと思うようになった。

注1 木で「井」の形に組んだ井戸のふち。また、ものを組むとき、「井」の形にする、その形。

問一 二重傍線部 a s e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部②「念入りに」、⑤「一種の職業病といえるもの」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

② 念入りに

- ア 心を込めて、祈るように
- イ 精魂込めて、真剣に
- ウ 細かい点に注意を払って、丁寧に
- エ 余すところなく、しつかりと
- オ むらなく、完璧に

⑤ 一種の職業病といえるもの

- ア ある意味では職業病と同類のもの
- イ 典型的な職業病とみなされるもの
- ウ 職業病の一つに数えられるもの
- エ いずれ職業病に認定されるもの
- オ 人々に職業病のように思われるもの

問三 空欄A・B・C・D・Eに入る最も適当な語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア からからと
- イ おずおずと
- ウ ぬくぬくと
- エ ゆったりと
- オ ぎすぎすと
- カ ゆらゆらと
- キ すらすらと
- ク どさりと

問四 傍線部①「敏夫は、かまがどう変ろうと一体一体に心をこめて、その人がひきずってきた体をきれいに仕上げようと思う」とあるが、ここに表れた

敏夫の心情の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 習練を必要としない重油焚きのかまに変わってしまったことは、自分の磨いてきた名人芸が必要とされなくなってしまったことであり、残念に思う気持ち。
- イ 自動的に作業を行える重油焚きのかまでは、薪で焼いたようにはきれいに遺体を焼くことはできないが、それでも心だけは込めて仕事をしようという気持ち。
- ウ かまがどのように変わろうとも、遺体を焼くという仕事は同じであり、自分はこれまでと変わらず、淡々と仕事をこなしていけばよいという思い。

問八 空欄Yに入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 炎の中で仕事をする消防士
- イ 過酷な修行を成し遂げた修行僧
- ウ 世界中を旅して回る大道芸人
- エ 師匠のもとで鍛練を積んだ職人
- オ 独創性を追求する芸術家

問九 敏夫の人物像の説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の仕事に誇りを持っており、精魂をこめて遺体をきれいに焼くだけでなく、遺族の気持ちに対しても細やかな配慮ができるが、好きな女性に対しては積極的に行動できずにいる人物。
- イ 遺体をきれいに焼くということに関して強いこだわりを持ったため、遺族の骨の拾い方まで指図してしまい、さらには好きな女性が棺に横たわる姿まで考えてしまうような、仕事に対して異常な情熱をもつ人物。
- ウ 遺体を焼いてそれを収めるまでを自分の仕事と考え、それを完璧なものとするためには、遺族がしっかり骨を拾えるようにその気持ちを引き立てようと、言葉巧みに遺族の精神状態まで支配してしまう人物。
- エ 遺体を焼くという仕事にプライドを持ち、技術習得のために心身を削るような厳しい習練を積むうちに、人の生死や自分の人生に対してニヒリスティックな感情を抱くようになってしまった人物。
- オ 背が低いことにコンプレックスを持っているため、好きな女性に自分の気持ちを打ち明けられずにいるが、自分の仕事に対しては強い自負心を持っており、仕事の技術を磨くためなら努力を怠らない人物。

問十 本文の内容や表現についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「頭から爪先までむらなくきれいな白い石灰が残る」、「高く燃え上る焰の消えたあとに、軽くて乾いた骨が残る。」など、リアルな表現を多用し、死というものが非情で無残なものであることを示している。

イ 遺体を焼くという仕事に自負心を持っている敏夫だが、好きな女性には仕事のことを話せず、さらに役場の都合で自分の職人技が不要になるかもしれないという状況に直面し、思い悩む姿を描いている。

ウ 遺体を焼くという仕事がどのようなものか、仕事に対する敏夫の思いがどのようなものであるかを、一体の遺体を焼き、その遺族が骨を拾うというエピソードの中に描き、人間の生と死について考えさせる内容となっている。

エ 火葬場という特殊な空間の中で、熟練した技を持つ敏夫がその技を極めるために精魂を傾け、心身までもすり減らしていく様を描き、一人の職人の仕事にかける情熱の激しさと強い信念のあり様を描いている。

オ 遺体を焼き、遺族の世話をするという仕事を通して、生者と死者の間に存在するかのようになった敏夫が、焼かれてゆく体もまだ焼かれぬ肉体を持つている人たちも違わないという独特な死生観を確立していく様を描いている。

(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

①この野菜は自分で手塩に() 育てたから、売っているものとは味が違う。

ア 上げて イ かけて ウ 取って エ 尽くして

②正反対の二人は何をするにも()。

ア 相いれない イ 煮え切らない ウ 腑に落ちない エ 物ともしない

③「() な娘ですが、なにとぞよろしくお願い申し上げます」と言つて、父は婚約者と彼の両親に深々と頭を下げた。

ア あさはか イ 杜撰^{ずさん} ウ ふつつか エ 無能

④彼は() 一貫から巨万の富を築いた。

ア 石 イ 米 ウ 銭 エ 裸

⑤「先生、明日の午後、職員室に() ますか」

ア いらっしやい イ いらっしやられ ウ いなされ エ おり

⑥博士は() の塔にこもったままで戦争が起こったことも知らなかった。

ア 堅牢 イ 象牙 ウ 太陽 エ 鉄窓

⑦先輩たちは試合でポジションをゆずり、後輩に（ ）を持たせてくれた。

ア 座 イ 水 ウ 肩 エ 花

⑧犯人の行動は（ ）の早わざであった。

ア 一石二鳥 イ 艱難辛苦 ウ 電光石火 エ 門外不出

⑨地震や大雨などの災害に強い（ ）を整備しなければならない。

ア アジェンダ イ インフラ ウ コンテンツ エ メンテナンス

⑩昨日のケンカが原因か、妻は朝から夫に（ ）な態度を取るようになった。

ア あっけらん イ つっけんどん ウ すっからかん エ ちゃらんぼらん

